令和３年度

宮崎市総合教育会議

会　　議　　録

令和３年度　宮崎市総合教育会議　会議録

１　日　時　　令和３年１１月８日（月）１５：３０～１７：００

２　場　所　　宮崎市役所本庁舎４階　特別会議室

３　出席者　　戸敷市長

【教育委員会】
西田教育長、今門代表教育委員、畠山教育委員、片山教育委員、小林教育委員

【意見聴取者】
神野教育 CIO

【オブザーバー】
野尻子ども未来部長

【事務局】
迫田教育局長
下郡企画財政部長
（企画総務課）川辺課長、井上課長補佐、川﨑課長補佐、堀指導主事、三角主任主事
（学校施設課）河野課長
（学校教育課）牧野課長
（教育情報研修センター）堀之内所長
（生涯学習課）中野課長
（保健給食課）大賀課長
（文化財課）　白坂課長
（子育て支援課）河野課長
（企画政策課）黒木課長、図師課長補佐、中城係長、中村主任主事

４　傍聴者　　４名

５　意見交換
「『宮崎市ならではの未来の教室』の創造について」
（１）タブレットを活用したこれからの学びについて
（２）いじめ・不登校対策へのＩＣＴの活用について

川﨑課長補佐	ただいまから、令和３年度宮崎市総合教育会議を始めさせていただきます。はじめに、会議の主宰者でございます戸敷市長からご挨拶をいただきます。
戸敷市長	本日は、お集まりいただきまして感謝申し上げたいと思います。今回で９回目ということで、教育委員会の皆様にも、宮崎の子どもたちのために、鋭意ご尽力をいただき、ご指導もいただいております。『みやざきっ子』をどう育成していくかということも含めて、これまで様々な議論をいただいた成果は出ていると考えております。感性豊かな子どもを育てようというのが一つの大きな趣旨ですので、私どもはしっかりと、子どもたちを宝として育成をしながら、将来に向けて努力をしていく、それは大人の役目であり、次にしっかりと繋げていかないと、私どもの責任は果たせないのではないかと考えております。そのことを重視してしっかりと進めていきます。 さて、昨年からコロナ禍ということで、今までにはなかった精神的なもの、物的なものも含めて、未曾有の被害も出ております。ただ、市民の皆様のご協力によって、昨日現在ですが、第１回目の接種が約３５万７，０００人で、８３％まで達成しております。また、２回目が８０％を超えたというところで、集団免疫を確保しながら、学校を休業することのない体制というのが見いだせてきたのではないか、そういったことから、子どもが安心安全な教育を受けることができていると考えております。 また、市内全小中学校に約３万２，０００台のタブレットを整備いたしました。そのことによって、今まで十分ではなかった、子どもたちの個々に合わせた学習状況の把握、あるいは、不登校の子どもたちとの連絡手段としての活用、これまで難しかった、引きこもりの子どもへの対応など、それが少しずつ緩和されて、やっぱり学校に行こうと、あるいは勉強しようという気持ちになっていただけることは、このＩＣＴの活用が、非常に今の時代にあった授業展開に活かされていると考えております。 しかし、先生方にも負担がかかっています。タブレットを活用した授業がどれくらいできるかという部分については、非常に困惑される先生もおられるでしょうが、情報教育アドバイザーを入れていただきましたし、今日も神野教育ＣＩＯにおいでいただいておりますが、いろいろなご指導をいただきながら、ＩＣＴを活用した宮崎市ならではの教育の方向性が出てきたのではないかと思っております。 まだ導入したばかりで、全てができるわけではありませんが、今後もＩＣＴをうまく活用して、子どもたちの将来に向けた宮崎バージョンの教育を考えていく必要があると思いました。今日はそういった議題を含めて、皆様方に、いろいろな議論をいただければありがたいと思います。このＩＣＴの活用に関しては始まったばかりで、どういう方向に持っていくかということも、私どもに

	課せられた課題も非常に大きいと思いますが、一般行政と教育行政との連携と、家庭、学校が、子どもを一番に中心とした視点で、どう連携し取り組むことができるかということを、今後、ご指導いただければ、ありがたいと思います。 今日はそういった意味でも、実のある会議にしていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。
川﨑課長補佐	ありがとうございました。続きまして、西田教育長がご挨拶いたします。
西田教育長	平成２７年度から、この総合教育会議が行われてまいりました。今年もこうして開催できることは、市長の教育行政への深いご理解があってのことだと感謝しております。教育委員会としましても、教育の現場が抱える課題を市長と意見交換し、共有することは、今後の教育行政のより一層の推進に繋がるだろうと考えております。 現在、教育委員会では今門代表教育委員をはじめ、教育委員の皆さん、そして教育ＣＩＯの神野さん、そして、事務局と一丸となって、教育施策の推進を行っているところです。 本日は、先ほど市長が申し上げられましたけれども、学校に１人１台のタブレットを整備していただき、いよいよ本年６月から、ＡＩ型教材等を活用した取組を始めました。まだ十分ではありませんが、そういったことを話題にしながら、今後の新たな教育の展開を進めていけたらと思っております。本日はどうぞよろしくお願いします。
川﨑課長補佐	ありがとうございました。それでは、本市教育ＣＩＯであります、神野元基様にご出席いただいておりますので、ここでご挨拶をお願いしたいと思います。
神野教育ＣＩＯ	神野といいます、よろしくお願いします。この後もまたご説明させていただきますが、私自身もともとＡＩ型教材の「キュビナ」というものを作っていた、株式会社 COMPASS の創業者であります。今は、その会社を離れておりまして、中央教育審議会や産業構造審議会などの、文科省・経産省の委員を務めさせていただきつつ、宮崎市も含め、自治体側の教育ＣＩＯというポジションをいただき、いかにＧＩＧＡスクール構想という新しい教育目標を達成するかということで活動させていただいております。この後、ご説明させていただく、この宮崎市の掲げる「次なる教育」に関して、また「教育ＣＩＯの役割」に関しましてもお話させていただきますのでどうぞよろしくお願いいたします。
川﨑課長補佐	ありがとうございました。続いて、本日の会議の流れについて説明させていただきます。本日は、会次第に沿いまして、１７時までの約１時間半、市長、教育長、教育委員、神野教育ＣＩＯの７名によりまして、意見交換を行う予定としております。 それでは、早速、意見交換に移らさせていただきます。ここからの進行につきましては、市長にお願いいたします。

戸敷市長	それでは、進行させていただきます。まず、今回の意見交換のテーマでございますが、「『宮崎市ならでは未来の教室』の創造について」ということで、その趣旨について申し上げたいと思います。 昨年度から整備を進めておりました、ＧＩＧＡスクール構想におけるタブレット端末の整備が本年５月末に完了しましたが、今後はこのＩＣＴを活かしていくために、常に進化していくものだと思いますので、幅広い視点から絶え間なく検討を続けることが重要と考えております。また、先ほども申し上げましたが、新型コロナウイルスによる影響が続いてる状況を打破し、子どもたちの学びを保障していくことが重要だと考えておりますので、「タブレットを活用したこれからの学びについて」、「いじめ・不登校対策へのＩＣＴの活用について」、この２点について、時間を区切って、委員の皆様からご意見を賜わりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。 続きまして、神野様から、今後の教育と教育ＣＩＯの役割についてということで、お話をお願いします。
神野教育ＣＩＯ	資料を使いながらご説明させていただきます。こちらは今、宮崎市の全校で展開されているキュビナというＡＩ型教材ですが、このような形で、子どもたち自体が自由進度で、かつ、一人一人に最適な進捗で進めていける教材になっています。こういった教材の利点としては、先ほど市長もおっしゃっていたような、コロナ禍において子どもたちの学びを保障していけるといったことがあげられます。例えば、家庭学習において、ＡＩ型教材を活用した教育を取り入れることによって、先生が、子どもたちが家庭でどのように学習をしているのか、その進捗も含めて、きちんと伴走できるというような授業も生まれていきますし、仮にその勉強が遅れたとしても、その子たち一人一人の学び方の中で、しっかりとその学びを取り戻していける、そのようなことが、期待できる教材ですので、しっかりと整備していくことで、子どもたちの教育の水準を上げていくことができるだろうと感じております。 実は、この姿は東京にある麹町中学校という、２０１８年に経産省と実施した実証事業でこのような姿ができたのですが、もちろんまだ宮崎市の全部の学校がこうなってるという話ではないものの、実は一部の学校では、すでにこれに匹敵するような完全自由進度学習が実現できています。モデル校を３校選定して取り組んでいる学校がありますが、その学校においては、このような姿ができつつありますので、来年度以降、いかにそういった学校を増やしていけるかを私自身考えていきたいと思っております。 そもそも、こういったＩＣＴを活用した教育が必要だと言われたのは、実は、Ｓｏｃｉｅｔｙ５．０といった次なる時代が到来し、ＩｏＴや、ビッグデータ、ＡＩやロボットなどが前提となる社会の中で、全ての産業が、そのテクノロジーを前提に変わらねばいけないというような議論が起こる中で、教育の世界も変わらなければいけないと生まれたのが、このＧＩＧＡスクール構想でした。

	実は、ＧＩＧＡスクール構想自体は、２０１９年１２月に可決されており、コロナウイルスが少なくとも日本ではまだ認識されていない頃に、ＧＩＧＡスクール構想は既に動き始めていました。その後、コロナ禍になり、学びの保障という観点で、各端末が使われるようになったのは、ある意味不幸中の幸いでした。 ただ一方で、元々ＧＩＧＡスクール構想が目指したものは、学びの保障ではありませんでした。では、ＧＩＧＡスクール構想が目指したのは、何だったのかというと、多様な子どもたちを誰一人とり残すことなく、公正に個別最適化された教育、これを実現することが、ＧＩＧＡスクール構想の目標だったということになっています。先ほど、市長もおっしゃっていた感性を育てる際に、やはり今の子どもたちは多様なんですね。様々な特性を持っていたりだとか、そもそも我々世代では皆テレビを見ていたのが、今は皆ＹｏｕＴｕｂｅを見ていて、皆が同じものを見ているという時代ではない、一人一人の感性、個性というものがどんどんできてくるといった時代において、そのような多様な子どもたちをとり残すことのない教育をどうやって実現できるか、この中には、やはり今までの、先生が紙とペンで黒板でやるだけの授業の中では、どうやってもやれることに限界があります。そこにいかにＩＣＴをベストミックスしながら、そのような教育現場を実現できるのかということが、このＧＩＧＡスクール構想の中に込められた大きな目標でありました。 そのＧＩＧＡスクール構想がどうやって、どのような学校現場を作るのかということを、この「令和の日本型学校教育の姿」という中央教育審議会の中で、２０２１年の春に、最終的に答申として文部科学大臣に提出させていただいたのですが、この左上の「個別最適な学び」というものと、右上の「協働的な学び」、この二つをそれぞれ往還させていく、そのような教育の現場こそが、このＧＩＧＡスクール構想なり、令和の日本型学校教育の目指すべき姿、つまりはＳｏｃｉｅｔｙ５．０時代において、目指すべき姿だろうという形で議論されました。 「個別最適な学び」というのは、本市でいうこのキュビナを使って、一人一人に最適な学びを届けるということであったり、それだけでなく、先生の高い専門性によって、一人一人に対して伴走支援をしていく、そういったことも、もちろんこの「個別最適な学び」にあたります。こうした個別最適化された教育現場が、今急速にこの宮崎市の中で増えていると実感しています。 もう一つ、この右上の「協働的な学び」については、何を表してるかというと、探究的な学びとも言われています。その生徒一人一人の好奇心だったり、そういうものに応じながら、ちゃんとその子たちが協働的に、誰かと協力し合いながら、ある事柄について極めて探究していくという、そのような学びを実現し、それを学校現場の中で、「協働的な学び」を行い、次は「個別最適な学び」で知識を学んで、そして、また「協働的な学び」でその知識を応用するような

	形で学んでいくことを往還していく、こういった教育が、次なる学校教育の中で必要だろうと言われています。 　私自身の教育ＣＩＯの役割としては、国がなぜこんなことを始めたのかということを、しっかりと宮崎市教育委員会の方につなぎ、さらに言えば教育現場、学校の先生方、保護者、そういう方々に対して、このような議論を接続しながら、宮崎市全体で新たな学びの姿を実現していくことが私の役目だと考えています。 　今年度においては、このキュビナを活用し、「個別最適な学び」をどう実現するかということが一つの重点的な取組でありますが、もう一つ、来年度以降に「協働的な学び」に力を入れるため、新しい現場を作っていけるように種蒔きとしてやってることがあります。経済産業省のＳＴＥＡＭライブラリーというものがあるのですが、その中で、宮崎独自の産業である宮崎マンゴーなど、そういったブランディングされた農作物がどのようにできて、どのように地域に対して貢献しているのか、また、それがどのようにサステナブルな形を作り得るのか、そのような探求的な学びを、本年、宮崎市の中でも、一部の学校に対して届けながら、こういった「個別最適な学び」を行い、その結果として「協働的な学び」ができるといった教育のあり方を、学校現場の中で少しずつですが実現しつつあります。 　来年度以降、これをいかに複数の学校でやっていくのかが、今後の課題であり議論になってくるのかなと考えながら、来年度以降も宮崎市に対してどのようなことができるかを、一緒になって考えていければと思います。以上です。
戸敷市長	ありがとうございました。それでは、意見交換に入りたいと思います。まず、教育長から教育委員会の取組の説明をお願いします。
西田教育長	説明に入ります前に、まず、タブレットの事業について、赤江中学校と大宮中学校の活用の様子を動画で見ていただきたいと思います。
	（動画視聴）
西田教育長	学校で様々な取組が出てきたということであります。それでは教育委員会の取組について説明させていただきます。 　まず、先ほど神野さんが言われたように、今の学校教育のあり方は大きな転換期を迎えております。教育委員会では、将来どんな苦難にも揺るがず、自ら未来を切り開く子どもを育てることを目指して、イメージ図を作りました。 　まず、根っこの部分を見ていただきますと、子どもたちは、家庭や地域住民などと触れ合いながら、その養分を吸い上げて、人間としての、太い幹を培うということです。その幹の部分が豊かな感性、思いやりの心、たくましい心など、人間としての基盤となる資質であって、豊かな感性を持つ『みやざきっ子』の育成に繋がる部分です。加えて、葉の部分ですが、これからの時代を生き抜くための五つの力を身に付けさせたいと考えています。学んだ「知識や技能を活用する力」、仲間と「協働する力」、自らの答えや価値を「創造する力」、主

	体性など「学びに向かう力」、「情報を活用する力」であります。このような力を身につけさせるために、これまでの学校教育の成果も十分に活かしたうえで、タブレット等のＩＣＴを活用した教育を行い、宮崎の子どもたちがイメージ図のような大樹に育つよう、取り組んで参りたいと考えております。 続きまして、現在のタブレットの活用状況について説明させていただきます。計画の進捗、成果と課題、そして今後の展開ということで話を進めます。 まず、最初に授業での活用ということですが、ご覧のとおり、タブレットの整備が本年５月末に完了しまして、６月から活用を始めております。「自分のペースでそれぞれの端末でインターネット検索が可能になった」、「自分の考えを授業支援ソフトを使って手軽に意思表示できるようになった」、また、「発表プレゼン等も視覚的に伝えやすくなった」というような、子どもたちの感想が出てきております。 続いて、ＡＩ型教材についてですが、小学校５年生から中学校３年生までに導入しております。まず、６月に入り、校内研修で先生方が少しずつ勉強を始めまして、７月に行った家庭への持ち帰りの試行に合わせて、段々と活用が増えてきました。夏休みの課題等も、このキュビナを活用しております。これに関しては、問題を選ぶことができるので、先生方の負担軽減、働き方改革にも繋がっています。 そして、新型コロナウイルス感染症拡大による影響もあり、やはり臨時休業等があった場合はしっかり使いましょうといった通知をしたところ、全校的な加速が始まったという状況でございます。 また、自宅への持ち帰りについても同時に進めておりまして、６月の中旬にＰＴＡや学校に説明しております。持ち帰りのルールをどうするかということと、同意書をいただくという形で進めました。そして、６月下旬からは、小学校６年生、中学校３年生を対象に持ち帰らせた後、７月中旬に小学校３年生から中学校３年生を対象に試行を行いました。各学校の実情に応じて、内容等においても時を追う毎に拡充してきたと感じております。 具体的な状況を見ますと、９月に学校を対象に、タブレット端末持ち帰りの調査をしました。持ち帰りの状況としましては、小学校３年生から６年生までの実施が３７校。また、４年生から６年生が３校で、５年生から６年生は７校ありますが、中には、２校は小学校１年生から持ち帰らせた学校もありました。 中学校は、２５校すべて、全学年持ち帰りを実施したという状況です。 それでは具体的な内容についてですが、オンライン接続を行い、子どもたちの顔がきちんと確認できるようになったのが７校、そして、先ほどの授業支援ソフトやキュビナ等を使った、オンライン学習を行うことができたのが４２校です。また、Ｚｏｏｍなどを使用し、お互いに顔が見えるような、オンライン授業まで実施できたのが２３校あり、未実施の学校はありませんでした。オンライン授業について、全ての学校ができるように、今後、指導していくことも

	一つの課題と言えます。 　それでは、タブレット活用のこれまでの成果と課題ですが、まず先生方に聞いてみました。「初めは不安もあったができるようになると、他にもっとできないかと思えるようになった」、「児童生徒間で教え合う姿が見られた」などの意見があり、これは協働的な学習につながっていると言えます。また、「自信のない子のスキルアップにつながった」との意見もありました。 　課題としては、「よりきめ細かなタブレット使用のルールづくりが必要」、「家庭学習の課題の出し方を工夫していく必要がある」、「保護者にも、良い面、悪い面もしっかり伝えなくてはならない」などの声がございました。 　次に、学校に届いた保護者の声ですが、「子どもがドリル教材に取り組んでいるときに、その様子を見ると、どのような内容に取り組んでいるのか、どの程度理解できてるのかというのがよくわかった」、「子どもたちが楽しんで使えている。親子のコミュニケーションがさらに広がると思う」、また、「家庭と学校が繋がってると、何かあったときのことを考えるととても安心だ」というご意見がありました。 　課題としては、「親がいないとき、どんな使い方をしているのかが心配である」「落下、故障や紛失が不安だ」、「タブレットの操作が、親自体がよくわからない、タブレットを持ち帰ってもアドバイスができなくて困った」、中には「持ち帰らせないでほしい」という意見もありました。 　このような課題が出てきている中で、我々もこの課題解決に向けて一つ一つクリアしていかないといけないと考えているところです。以上です。
戸敷市長	それでは、皆さんから意見をお伺いしたいと思います。まず、今門委員お願いします。
今門代表教育委員	私が学校訪問をして感じたことを述べさせていただきたいと思います。 　先週の金曜日に、広瀬北小学校に学校支援訪問に行ってきました。そこでタブレットを使った授業を中心に授業参観をさせていただきましたが、算数、国語、社会などの教科や、特別活動でタブレットを使った学習をしておりました。国語の授業では、児童全員分の作文をタブレットの中に読み込んでおり、その作文の中から、自分のグループの子の作品を画面上に呼び出して、それに添削を加えるという学習をしていました。赤いペンで、自分ならこんなふうに書くといったことや、作文の感想を画面上の友達の作文に書き入れていました。 　タブレットの取扱いは手馴れたもので、もうここまで使いこなしているのかというのが、私の感想でありびっくりしたところです。画面を大きくしたり、小さくしたりしながら、書き込む自分の文字の大きさを調整していました。そのほかに、新規採用の先生もタブレットを使った授業をされていましたが、先生も児童も操作に慣れていると感じました。一緒に授業を参観されていた指導主事も、非常に感心しており、自分はこうした授業を経験していないので、自

	分と教育現場との差に不安感を感じる時もあるといった話をされていました。それほどの短期間での進み具合であったと感じております。 　操作に慣れていない児童には、どのような指導をされているのか、校長先生に話を聞いてみたところ、「そこは心配いりません。子ども同士でどんどん教え合っています。」とのことでした。私は、できないことは恥ずかしいことではないこと、お互いの良さ見つけ合って助け合うこと、思いやりのある子どもを育てることが、学級経営の基盤で、学力向上に繋がっていくもとになると、自分で考えていますが、やはりそれが一番大切であると改めて感じたところです。思いやりのある子どもを育てる。当たり前のことですが、それがしっかりできていると子ども同士助け合って、お互いに高め合っていくんだと感じたところです。 　中学校は住吉中学校を訪問しました。社会科で情報を収集する学習を参観しましたが、情報収集先がどれぐらい信頼性のおけるものか、少し不安に感じたところを、指導主事が的確に指摘をして指導しており頼もしく感じました。生徒はもちろん操作は非常に慣れていて、一生懸命意欲的に取り組んでいました。 　ここでも校長先生に話を聞いたのですが、面白い話を聞く事ができました。生徒は、昼休みにタブレットを使ってもいいそうですが、ゲームをしていたので、先生が注意をされました。すると、生徒は、「このゲームはタブレットの中に入っているものです。」と答えたそうです。「タブレットの中のソフトにどんな内容のものが入っているのか、もう教員の方が追いついていない、本当に今そういう状況にあるのです。」と校長先生も苦笑いをされました。それぐらい、生徒はタブレットに慣れて、先へ先へと進んでいくという話をされていました。先生も大変だなと思ったところです。小学校も中学校も、短期間でよくここまできたものだなと関心しました。以上です。
戸敷市長	ありがとうございました。確かに子どもたちのほうが先行して動いているという状態もあると思いますが、それに、アドバイザーの方々がどういう風にバックアップしていけるかというところが大事なことかなと思いますね。現場を見てフォローし、より良き方向にもっていくというのが必要であると思います。６月から活用が始まったという、本当に短期間であるのにもかかわらず、しっかり使って、それを授業に活かしたり、遊びまでできるというのも、今の子どもたちはすごいなと思います。そういったことも確認をしながら、次の対応のあり方を考えていかないといけないですね。次に、畠山委員お願いします。
畠山教育委員	私も久しぶりに学校支援訪問が開催され、小学校、中学校と伺いました。小学校では、これが小学生かなというぐらい、１年生から６年生までしっかりした表情と意欲を見せてくれました。 　授業を見ると、子どもたちが同じ方向を向いて学んでいるという姿がとても印象的でした。これまでのタブレット無しの授業の場合には、中には教科書を開いていない子どもや、外を見ている子どもがいたりということもありました

	が、タブレットを使った授業では、皆が興味を示し、授業を受けているという姿が見られました。タブレットの力というのは、子どもたちにとっては、何かを引き出す、有意義なものになっている印象を持ちました。 　また、先生方は、チャレンジしながら、子どもたちに向き合っていくと話をされました。若い先生がリーダーになって、そして年配の先生方を引っ張っていくという、これまでにないそういったスタイルが生まれているとのことでした。先生方が本当に謙虚に、学ぶ姿勢を持って子どもたちに接していると感じられた、とてもいい学校支援訪問を経験させていただきました。私たちも、子どもたちの変化についていけるような、大人になりたいと感じました。以上です。
戸敷市長	ありがとうございました。先生達も一緒になって取り組んでいく、初めてのスタートですから、その負担はかかるけれど、先生達も面白がってやっていける。そして、子どもたちもさらに同調していく、学びの中では重要な事ですね。本とノートではできなかったことを、把握できるということも大事なことですね。
畠山教育委員	もちろん、本やノート、鉛筆を綺麗に使うことや、立腰の姿勢で授業を受けること、挨拶をすることなど、これまで先生方が教えてこられたとても大事なことも、きちんと取り組まれたうえでの、このタブレットの取組であると思うので、学校支援訪問では、両方進めていただいていると感じたところでした。
戸敷市長	片山委員は、保護者として、子どもがタブレットを家庭に持ち帰るという状況をどう感じていらっしゃいますか。また、それを踏まえて、学校のあり方、家庭のあり方は、どうあるべきだと思われますか。
片山教育委員	私も先日、加納小学校に学校支援訪問をさせていただいて、１年生の授業を見せていただいた時に、学校全体で「スタンダード×ＩＣＴ」を掲げて取り組まれており、「かける」というのが重要で、これまでのスタンダードも置き去りにせず、ＩＣＴをかけていくということを凄く興味深く聞かせていただきました。 　私には小学１年生の子どもがいるのですが、こども園から小学校に入学し、急に４５分座りなさいという授業になってとても疲れて帰ってきていました。どの授業においても、タブレットを活用されており、私は算数の授業を見させていただいたのですが、タブレットを使った授業のところでは、子どもたちが楽しそうに、興味深くタブレットの中の三角形を動かしていました。また、従来の授業では、黒板を使い、先生が三角形の模型を移動させて説明していました。どちらがいいとか悪いとかではありませんが、やはり子どもたちが直接インターネットに繋がる時代の中で、ＩＣＴを活用した楽しさがある授業を受ける事で、算数の苦手意識がなくなるかもしれないと、タブレットに期待を感じたところでした。 　また、タブレットの導入前にも、先生によって指導方法の個人差があったと

	思いますが、タブレットの活用が始まった今、先生によって、指導の差が開かないようにお願いしたいというのが、保護者としては思うところです。 　教育委員としては、たくさんの方の想いやタブレットの良さを目の当たりにしておりますので、保護者に対して伝えて行きたいと思うところです。 　キュビナの活用に関しては、小学２年生のかけ算のつまずきが４年生、５年生で影響してくると先生方に聞いているので、「個別最適な学び」が可能になるという点においては、ものすごく素晴らしいことだと思っています。今までのスタンダードな授業展開では、どうしても決められた時間内に授業を進めなくてはならなかったという中で、ついていけない児童生徒は、理解をしていないわけですから、さらに分からなくなって、授業が負担となったり、できない自分を責めたり、学校に行くのが楽しくない状況になっていたかと思います。その点、本人の習熟度にあった学習が出来るキュビナは、素晴らしいと思いますし、一人も取り残さない教育が、学校で学べるようになることを期待をすると同時に、キュビナで学習を進める中で、クラスの中で学力の差が更に大きくなるのではないかと気になったところでした。 　ただ、先程、中学校でのタブレット活用の様子をビデオで見せていただいた時に、子どもたちが、お互いに教え合っているという事を聞いて、先生が生徒を巻き込んでいくことはとても大事で、先生達の目というのが、これからの「個別最適な学び」や「協働的な学び」においてますます必要になるのかなと思ったところです。 　持ち帰りに関しては、小学校６年生の子どもがいるのですが、毎日家に持って帰ってきています。先ほどのタブレットの使用に関して、保護者からの良い意見として、「学校と家庭が繋がっていると、何かあった時とても安心する」という声があがっていました。これについては、ロイロノートで、保護者から学校の先生に手紙が送れるようになっていて、例えば週末や夜中に何か心配なことを先生に送った時に、先生がそれを見るタイミングを、保護者に教えていただかないと、先生の働き方改革という観点からは、少し懸念されるなと思ったところです。私も一度、週末に先生に送りましたが、先生から返事は来ませんでした。ただ、子どもが夜に宿題を提出したときに、朝の６時ぐらいに、添削されて戻ってきていたので、先生の負担になるのではないかと思ったところでした。
戸敷市長	持ち帰りで、子どもや保護者にも様々な変化が出たというところですね。キュビナがとても良いという意見が出ましたが、神野さんいかがですか。
神野教育ＣＩＯ	キュビナの活用状況としては、他の自治体と比べても大きく進んでいる実例が生まれつつあると感じています。教育格差の話の中で、学び合いというところも取り上げていただいた中で、教育格差の話で言いますと、例えば、コロナやインフルエンザにかかってしまい、長期で学校に来れなくなる子どもが現れることもありますよね。そういうときに、特に数学とか英語などの教科は、１

	ヶ月の授業で分からなくなると、その後の授業が全部分からなくなってしまうという学問になっています。そういったことを起こさないというのが、このキュビナの一つの特徴でもあります。学び合いということもそうですし、個別最適な進捗は、取りこぼしなどを起こさないということが非常に大切な事なので、この後、コロナ禍はどこまで続くとか、児童生徒にコロナの感染者が出たときに、学校が全部休校するということでもなく、その子だけが出席停止になるようなことも考えた時に、一つ、このような「個別最適な学び」を、学校現場に今から導入しておくことは大切なことなのかなと感じています。
戸敷市長	一人も取り残さないという状況を常に考えないと、一度遅れてしまっては取り返しがつかないので、そこをキュビナはフォローしてくれるというのは、非常にありがたいと思います。ただ、先生方の、夜間でも対応しなければいけないというのは、非常に大変であると思いますので、そのあたりをどう対応していくかを、保護者と先生方と考えていかなければなりません。 それでは、小林委員お願いします。
小林教育委員	１０月に着任したばかりですが、宮崎東中学校に学校支援訪問させていただきました。非常に印象的だったのは、ＩＣＴを活用したということも顕著な状況だったのですが、校長先生が繰り返しおっしゃったのが、学びの土台をしっかりさせたいということでした。いわゆる、教育の中の不易と流行のバランスをしっかり持って育みたいという思いなんですね。そういった様子をしっかり見させていただきましたが、そういった基盤がきちんと整ったうえで、さらにＩＣＴという新しいものに対して対応できる力が身に付いていくということを、改めて勉強させていただいたところでした。 こうした宮崎市の取組はかなり注目されています。私は宮崎大学に勤めておりますが、学生たちにキュビナの動画を見せると、自分たちが受けた教育ではないが、非常に画期的で、しかも学習権の保障にもなっていく、そういった取組だということで彼らはすごく衝撃を受けます。 このことは、実は学校の先生方も同じような感想を持っておられます。私は文部科学省のＩＣＴ活用アドバイザーもさせていただいており、県内もいろいろと行かせていただいています。その中でも、宮崎市がＧＩＧＡスクール構想を先取りした取組を、この短期間でされていることは目覚しいところがあると感じています。このことは、こういった組織の中で、例えば教育ＣＩＯの神野さんをはじめ、教育長がしっかりとリーダーシップを発揮されて、さらに各課の指導主事の皆さんが、それぞれの持ち場でいろいろな魅力的なものを、推進されている様子が顕著に見られていると思います。先月もＩＣＴ基本研修というのを、宮崎市教育情報研修センターで実施してきましたが、やはりその中でも、時代を先取りした内容をニーズとして与えていました。具体的には、ＮＴＴランニングシステムという会社さんとコラボした、いわゆる先進地の事例をどんどん先生方に提供していました。こうした、それぞれのセクションの方々

	の努力や、関係者の皆さんが手を取って、取り組まれてる姿に感銘を受けているところです。
戸敷市長	教育長はいかがでしょうか。お話を聞かせて下さい。
西田教育長	６月から始めて、どこまで持っていけるかが非常に課題であったわけですが、コロナ禍であって、持ち帰り学習を必然的にやらないといけない環境にあったことは、ある面で後押しをしたなという感じです。先生たちにおいても、例えば、５０代後半の先生が、初めはなかなかタブレットの活用が進まなかったのですが、活用が進んだことで、学校支援訪問で私にも「やってみませんか」と声をかけられました。実際に使ってみて、その良さを感じたら、やはり先生方も変わるものだなと感じました。これだけ急激に活用が増えたということは、やはり、先生たちがこういったＩＣＴを取り入れた授業の良さを感じてきたのかなと思ってるところです。
戸敷市長	ありがとうございました。経過をお聞きするのと、今後活用していく部分の話をいただきました。タブレットを活用することについて、まだこれは必要じゃないかというところはいかがですか。私も見させていただきましたが、本当に、半年ぐらいでこれだけ伸びてきているということは、システムがいいのでしょう。子どもたち同士で学び合い、共有することや、先を探求するような力というのは、もう持ち合わせているという感じがします。プログラミング教育などで、競争し合ったりしている子どもたちもいるということは、心配な点もあるのですが、許容範囲をしっかりともって、どんどんＩＣＴを活用して動かせる、また学びが次に繋がるということについては、私たちと違う可能性を秘めているのだと感じます。Ｓｏｃｉｅｔｙ５．０というのも、時代の流れとしては絶対必要な教育だと思いますが、そういったことも含めて、こんな活用ができるのではないかというものがありますか。小林委員いかがでしょうか。
小林教育委員	先ほど、教育長がおっしゃったように、６月に活用が始まったばかりの際は、若い先生が先導をきってという面もあったのかもしれませんが、これからは、むしろベテランの先生方の、これまで培ったノウハウというものを凝集させて、先ほども不易と利益のバランスといいましたけども、そういった新しいものを取り込んで、もっと魅力的な授業を展開しようという、先輩方の先生の勢いを最近感じ始めていますので、ぜひ、そういった機会をつくって活かしてしていただきたいと感じています。
戸敷市長	一つ目のテーマとしては、たくさんご意見いただきましたが、今後、どう利用していくかということは、これからも継続した検討が必要であるし、私たちも、子どもたち以上に次のことを考えていかないといけないと思います。大変な責任があるし、今の段階で評価されていることを、更に伸ばしていくことは、全員にご協力いただかないと難しいことだとは思いますが、学校のあり方から変えていくことを、ぜひ目指していければと思いますのでよろしくお願いいたします。

	それでは次のテーマについてですが、いじめや、不登校についても、ＩＣＴの活用が重要になっていくと思っております。「ふれあいトーク」で各学校をまわって、子どもたちと直接話をしているのですが、タブレットを利用する中での弊害もあるということも聞いています。 まずは、いじめ・不登校についての教育委員会の取組を教育長から説明をお願いします。
西田教育長	ＩＣＴを活用した不登校対策についてですが、現在、本市も不登校児童生徒数は、全国と同様に増加傾向にあり、大変苦慮する状況にあります。 教育委員会では、不登校児童生徒への対応の新たな方策として、このタブレットを活用した取組を進めております。 これは１０月２８日に行った調査結果ですが、不登校児童生徒が在学する学校において、全ての学校でタブレットを活用しており、また、その中で活用した不登校児童生徒数の割合ですが、小学校が４７．４％、中学校５９．３％で、全体で５５．２％となっております。 具体的な活用内容としては、ケース別の活用状況を示しておりますが、キュビナを自主学習として活用する、これが一番多くなっております。家庭に帰って自分で勉強することができるので、こういったソフトが非常に有効活用されております。もう一つは、ロイロノートやＺｏｏｍを活用した連絡手段、これが非常に増えてきています。これにつきましては、コロナ禍で午前中のみの授業となった期間があり、その際に、ロイロノートや、Ｚｏｏｍを使用して、児童生徒の顔が見えるような形での連絡手段として使用し、それが非常に有効であったとのことでした。学校によって、取組が様々ではありますけれども、連絡手段や自主学習といった面で、不登校関係でもタブレットの活用が進んでいます。 続いて、事例の紹介です。まずＡ小学校では、これまで全く学校に登校できなかった児童がおりまして、この子は歴史に対して非常に興味がありました。そのため、Ｚｏｏｍを使って歴史の授業への参加をきっかけに、相談室に登校できるようになったということです。実際の授業では、Ｚｏｏｍを使い教師が授業を行う様子を配信し、教師は画面上の児童に適宜声をかけます。そうしていくうちに、次第に児童もマイクを使って先生に話しかけることができるようになりました。現在は、修学旅行に向けての話し合いの際に、教室に５回入ることができるようになりました。 また、これはとても良い事例ですが、３年間学校に出てこれなかった子どもが、このタブレットで先生と連絡を取ったことにより、学校に出てこれるようになってきたということがありまして、やはりこのタブレット活用の影響は大きいと感じたところです。 続いて、在宅の児童生徒への活用についてですが、これまで、学校ができることとしては、家庭訪問、そして電話連絡しかできず、また、学習の機会の保

	障は、大変難しかったという現状です。そうした中で、Ｃ小学校では、ロイロノートを単なる連絡手段としてだけではなく、友達との絆づくりにまで結びつけるなど、タブレットを活用することで、在宅の児童生徒との新たな繋がりができました。 　また、Ｅ中学校では、Ｚｏｏｍを使って保護者や児童生徒との面談への手段として活用をしております。このような事例が段々と増えてきました。タブレットを活用して学校と児童生徒や保護者が連絡を取りあうことは、不登校児童生徒だけではなく、全ての子どもについての変化に気付きやすくなります。特に、いじめの早期発見や、早期対応にも繋がるという点で、我々としては期待しているところです。 　現在の課題としまして、実際に家庭で使用するためには、保護者の理解を得ながら子どもが使うことになりますので、タブレットの設定や基本的な使い方を保護者が理解する必要があります。また、本人と会えない場合もありますので、そこをどう解決していくかも課題としてあります。このような課題も、我々としては克服しながら、不登校だけではなくいじめの問題についても、うまく活用していきたいと考えております。
戸敷市長	ありがとうございました。いじめから自殺に至った事もあります。こういった悲しい出来事は、しっかりと把握をして対応しないといけないと思います。 　不登校への対応としては、タブレットを活用して、参加したいという意欲を、子どもに持たせることができるなど、色々な活用方法が出てきており、まだまだ利用価値があれば利用しないといけないし、例えば、ゲーム感覚での授業などできないかと教育長とも話をしております。そういったことで、こんな面白い授業があれば、自分も参加したい、ぜひ学校に行って話をしたいし、授業を受けたいという変化に繋がればなと思っているところです。 　いじめ、不登校対策は難しい課題ですが、そこにおいてもこのタブレットの活用が、私達が課題を克服していく一つの手段になってきたのかなと思います。 　このことについて、今門委員いかがですか。
今門代表教育委員	今、教育長から宮崎市でも不登校の児童生徒が、年々増加傾向にあるということで、どう対応をしていくかといった説明がありました。タブレットを配布したのが６月、それから、５ヶ月の１０月時点の調査で、５５．２％の不登校児童生徒が活用したということですが、これは驚くべき数字であり、そのアップデート力に頭が下がる思いです。 　不登校児童生徒は、あまり学校に来れないわけですから、操作を教えることも、苦労があったのではないかと思いますし、また、相談室登校や保健室登校の児童生徒にも学校が一丸となって教えたのではないかとか、そういった、多くの課題があった中で努力をされて、５０％を超える活用に至ったことは、相当な手間も時間もかかったであろうけれど、本当に素晴らしいことであり、一生懸命取り組まれた先生方に本当に感謝したいと思っています。

	昨年、心の談話室小戸教室を訪問しました。そこでは退職された校長先生方が、タブレットを使って中学生を一生懸命指導されているのを見せていただきました。一般的に不登校の児童生徒は、不登校の期間で学力の差ができてきます。そうした児童生徒に対し、個々の習熟度に合わせた問題を提示できる学習ができるというとても良い例で、そういったことでは、タブレットというツールがとても大きな成果をあげていると感じました。 今後の課題として、本人に会えない家庭もあるということでしたが、なかなか難しい問題で、私も現役の頃に不登校児童の家庭訪問をしたことがありますが、ほとんどの場合、家にいらっしゃるのではないかと気配を感じてチャイムを鳴らすのですが、人は出てこず保護者にも児童にも会えない、そういうことばかりでした。そういった課題については、学校以外の方々の手を借りて、地道に焦らず諦めず、じっくり取り組んでいくしかないのかなと思います。もし、それでうまくいったケースがあれば、一刻も早く、他の学校にも知らせてその成果を共有し、そういう子どもたちが一人でも学習ができるようにして欲しいと思います。いずれにしても、学校は、不登校の児童生徒を少しでもなんとかしたいと思っているし、先生方も一生懸命取り組んでいらっしゃるので、そんな先生方にエールを送りたいと心から思います。
戸敷市長	ありがとうございます。生徒同士のちょっとしたかけ違いから不登校になったり、いじめから不登校になったりということもあります。タブレットで情報を共有できれば、いじめや不登校対策に非常にプラスになることが出てくるかもしれないですね。 また、対面というのは、他人の目もあるだろうから、なかなか子どもも心を開かないということもあるかもしれません。親とも話ができないという子どももいると考えると、先生は一番、身近な相談者であり指導者であると思います。対面ではなくて、タブレットを活用することでの、社会への接しやすさもあるのかもしれません。片山委員いかがでしょうか。
片山教育委員	私も不登校の児童生徒の支援をさせていただいていますが、そういった支援を受けてやっと学校に行くことができるようになる子どもは、休んでいた間の学習の不安があり、別室登校、保健室登校を経て、やっと教室に入るのですが、なかなかそこで授業内容についていけないようです。何をやっているのか分からないということで、４５分、５０分座っていることがとても苦痛だという子どもが多く、そういったときに、負の連鎖のように、自分がだめだと落ち込んでしまい、また学校に行けなくなってしまうこともあります。また、先生方が不登校の児童生徒だけに時間を割くことが難しいといった負担もあります。そういったことに対して、キュビナを活用し自分の時間で、自分の進み具合で学習できるということは、すごく画期的だし、本当に期待しています。 ただ、私が個人的に思っている事ですが、様々な理由があるとは思いますが、基本的な生活習慣が整っていない子どもを、どう学習意欲へもっていくかを、

	とにかくタブレットということではなく、その背景を踏まえて、だからうまくいった、だめだったというところを数値化など、目に見える形で評価していくことも大事なのかなと思っています。
戸敷市長	不登校での学習の遅れで、また不登校になってしまうといった状況ですね。そういった面でも、キュビナで、遅れた学習の補填ができる点が、保護者も子どもも求めていることかもしれないですね。
神野教育ＣＩＯ	片山委員がおっしゃられたように、ある意味、この５０％を超える活用数は、キュビナが救えた不登校の子どもたちの数字なのかなとは思います。ですが、今後、キュビナに一生懸命取り組めば、救える不登校の子どもたちを１００％まで持っていけるかというと、そういう話ではないのかなと思います。 片山委員がおっしゃられたとおり、その子たち一人一人が不登校になった原因は様々あるはずで、それがたまたま、５０％を超える子どもたちは、学習の遅れという点がキュビナで解決できたかもしれませんが、それ以外の子どもたちの不登校という事態に対して、我々がどう取り組んでいくかを考える際には、もう少し学びの場を作っていかなきゃいけないですとか、ドアノックをどうやっていくのかとか、子どもたちとの接点をどう作っていくのかなど、様々な施策を考える必要があるということかもしれないと感じました。
戸敷市長	やはり面白さから、子どもたちはタブレットでずっとゲームをやっているのでしょうね。私たちでは分からないゲームなど、どんどんやってるわけですから。
神野教育ＣＩＯ	面白さということも多分にあると思っていて、その面白さの中でタブレットを使っている子どもには、キュビナで同じようにできるかもとアプローチができたと思います。 ただ、不登校の児童生徒の中には、その面白いことにはしって不登校になったのではなく、そうではないパターンの不登校の子もたくさんいると思っています。そういった子どもには面白さで接点を作っていくというよりかは、その子どもの心の中に何があるのかとか、どんなことを考えているのかとか、何に傷ついたのかなど、そういった心に寄り添う必要があると思っていて、そこに対してはキュビナは無力である気がします。
戸敷市長	分からないから、学習意欲がなくなったといったような不登校で、また不登校の期間で更に学習が遅れるといったような部分については、フォローができる状態であるという事ですね。学校に行かずとも、それで十分フォローできるような環境をつくることができれば、かえってプラスになるのではとも思います。 それと、心の問題という話もありましたが、一対一で先生と話ができる、そういった関係づくりであったりが大切であり、先生への負担がかかるかもしれませんが取り組むべきかなと思います。

神野教育ＣＩＯ	それは、まさにスクールソーシャルワーカーであったり、様々な外部人材の方々を活用しながら、どのような体制で継続して取り組んでいくのか、また、ＩＣＴも当然そこにあって、例えばですが、リアルにドアノックをしに行くということもあれば、今日はＺｏｏｍで話してみないかなどといった形で、インターネットを使ってドアノックをするということも今後あり得ると思います。 そういったことも含めて、その子とのコミュニケーションをどう確立していくかを考えていくことは大切なのではないかと思います。
戸敷市長	インターネットを活用してドアノックをしていくのはいいかもしれません。先程、今門委員が言われていたように、家に行ってもなかなか会えないという部分を、これからは非対面であるネットを活用するということも必要なのではないでしょうか。
神野教育ＣＩＯ	これは余談になりますが、１０年ぐらい前に学習塾をやっていた頃の話です。学習塾に中学一年生の１学期中に不登校になり、塾にも来れなくなってしまった子どもがいたのですが、その子はＹｏｕＴｕｂｅに自分で動画を投稿していました。登録者数なんて大していない、全く有名でもないような動画でしたが、その要は、ＹｏｕＴｕｂｅ動画のコメント欄でした。私がコメント欄に書き込むと返信してくれました。電話しても出ないし、家に行っても会ってはくれないのですが、彼が出してる動画のコメントに私がコメントをつければ、コミュニケーションができるのだと分かったので、ここからだなと思いました。そこから始まって、そのあと自分でもその子の動画に面白かったよという自分の動画を出したりして、その子とのコミュニケーションを確立したことを今思い出しました。 実は、インターネットには様々なコミュニケーションの仕方があるし、それこそ、本当の意味で家にいるのであれば、多分子どもたちはインターネット中のどこかにいるんです。そこに我々が出向くというようなあり方まで作れたりすると、とてもＧＩＧＡスクール構想らしい対策かなと思います。
戸敷市長	ありがとうございます。これからは、インターネットを活用した子どもの心への寄り添い方の検討も必要かもしれないですね。 それでは、小林委員いかがですか。
小林教育委員	先ほど教育委員会の取組説明の中で、数値として見せていただいて感じるのは、ここまでまとめるのは大変でしょうが、やはりこうしたきちんとしたエビデンスといいますか、根拠が示されていると、皆で議論ができるなと感じました。以前、学校教育課の牧野課長と話していた時に、まずＧＩＧＡスクール構想で一番やりたいことが、この不登校対応であると熱く語っていたことが非常に印象に残っており、それを本当に実現されているのだと感じています。神野教育ＣＩＯがお話されたように、誰一人取り残さないという視点からも非常に重要な取組であると思います。

	注目すべきは、ＡＩ型教材の自学自習１９４名の活用者数の中の５２名が、ほとんど学校に登校できない児童生徒であったというデータです。これについては、ＡＩ型ドリルは学習の履歴が残るので、そうした履歴が残ることが、先生方の評価の対象になり得ると考えると、もしかすると、例えば何かしら言葉をかけてあげるなどの、ドアノックの一つきっかけとして、寄り添う手立ての一つにもなるのではないかと感じます。そういったところから、先生方がアプローチをするなど、これからの対応の仕方を、新しい手法を検討しながら取り入れる時代になっていると感じながら、今回の成果を見させていただきました。
戸敷市長	タブレットなりＡＩというものが、私どももゲームのようにしか、今まで感じていなかった過程で、逆にそれが一番大切になってくるという見出し方は、ものすごく大切な機会かもしれないですね。そういった思いで牧野課長が取り組もうとしていたことが、今、成果になっているのかもしれません。 本当に、今回のキュビナやタブレットを活用した学校が、どれだけ変化をもたらすのかというのは、チャンスかもしれないですね。いじめであるとか、不登校であるとか、本当に自分にあったものを見出すという機会は、先ほど神野さんが言われたとおりかもしれません。何が接点なのかを、早い段階で把握しないと、長く不登校の状態が続いてしまいますので、教育委員会全体で考えないといけないですね。将来的なことも十二分に考慮したうえで、ネットやタブレットを利用するのは、今がよい時期であるとは思います。
畠山教育委員	私も含めてそうですが、多様な、一人一人に寄り添うという部分で、大人も子どももしかしたら、同じように何かを求めていて、いじめとか不登校をとおして、何かを訴えているところがあるのではないかと思います。１人も取り残さないという視点からみると、対面ができなければ、いろいろな手段を使い、人間関係を作っていくことに役立てていくということも、これから一つの大きなコミュニケーションのツールになっていくと感じています。 どこかで繋がり、分かってくれた、認めてくれたと感じることができると、パッとドアが開くのかなと思います。だから、そういった時に、私にも寄り添って欲しいなと思うのと同じで、そういった人と出会ったときには、寄り添ってあげられるような人でいたいし、子どもたちも大人も求めているところは、何か共通している気がします。そういった中で、時間が止まってしまった子どもたちの、その間を埋めていけるような学習ツールがあると、大きな一歩に繋がるなと感じたところです。 いじめや不登校がなくなるといいですが、宮崎市はいじめや不登校児童生徒数が多いですよね。だけれども、それはいじめられた、苦しかったと言っていいんだという、成果であると私は思っています。だから、ＩＣＴを活用して言葉にできる、何か訴えることができる、そういうことも大事な手段になるのではないかと感じています。

戸敷市長	私たちはそういった思いを共有しておかなければならないというのが前提でしょうね。心を開き出す、思いやりの心を育てるといった、そこに辿り着く努力を、このタブレットなりＡＩの活用で、今まで目がいかなかったところに、目をつけることが大事なのではないでしょうか。
西田教育長	今までできなかったことができるという視点で、例えば、完全に自宅に引きこもってる子どもたち、そして学校には来れないが学校外のフリースクールに通ったり、教育支援教室に登室できる子どもたち、学校の別室に登校している子どもたちなど、様々なケースがあります。そのケースに応じて、原因とあわせて、細かにデータを蓄積していけば、もしかすると、こういった子どもたちには、こういうことが合うといったようなことが発見できるかもしれないので、データの蓄積を活用し分析していくことで、成果も一つ、今後見られるといいかなと考えております。
戸敷市長	子どもたちのケース別の活用の状況などをデータ化していきたいということでしたが、今までは、ここまでたどり着かなかったですよね。評価としては、今までは把握することもできなかった、ＡＩ型教材を自学自習に活用した児童生徒が１９４名で、５５．２％であったということを、把握にまで繋げることができたことは、素晴らしい活用状況であり、このように出されたデータは、次のステップに繋がりますよね。 神野さん、こういった活用事例は、他の自治体でもありますか。
神野教育ＣＩＯ	不登校児童生徒のＩＣＴの活用数まで数値化されたものは、なかなか無いですね。文科省が全国的に取るとか、そういうケースの中でも、ＩＣＴの活用状況までのデータというのはほとんど見たことがないです。 今、全国で不登校は過去最多であり、今後も最多を更新し続けるぐらい、不登校が増えると言われています。そうした中で、このＩＣＴの活用状況までも含めて数値化をしていって、不登校対策をどうやって取り組んでいくかを教育委員会で考えるという体制を敷いているのは、すごく進んでいるし、とても効果的なことだと思います。この数値を見ながら、どのような対策を立てていくか議論を進めていくことはものすごく先進的であるし、全国的にも、伝えていくべき価値のある話だと思います。
戸敷市長	私は、子どもたちだけではなく、親にも何かできないかなと思っています。 子どもたちはこんなに勉強がしたいと思っていることを、親が分かっているのかどうか、親が学校との接点を持たず、何も分からないという状態はよくないと思います。 親が学校に１回も出てこない、授業参観にもこない、そういった子どもたちはどんどん学校から離れていってしまいます。そこにもう一つ、子どもだけでなく親にも、タブレットから浸透できる先に、先ほど片山委員が話をされたように先生とのやりとりや、子どもと親の会話が増えるよう、先生と親と子どもとの３者連携ができるようなことが、少しずつできないかなと思います。

神野教育ＣＩＯ	都市部の中では、選択的不登校ということが実は結構あります。これは何かというと、フリースクールと呼ばれるような、いわゆる、学校ではない場所だけれども、朝９時から夕方１５時ぐらいまで、学習指導要領に完全に則った授業のようなスタイルでやっていて、時には、バカロレア・インターナショナルスクールのようなことを帯びていたりしながら、フリースクールなので、学校認可を受けているものではありません。その指導のもと、例えば、オランダのイエナプランだとか、そういった世界的にも素晴らしいと言われた教育を取り入れた少人数クラスの、学校のようなものは現れ始めています。 先ほど申しあげた選択的不登校というのは、地元の公立小中学校に通わせるより、年間１００万や１９０万ぐらいであれば、そちらに通わせたいというような形で、保護者が選び、だけど学校認可を受けていないので、その自分の所属する学校に対して、不登校という扱いで届け出を出し、そちらに通わせる人が段々出てきています。 これは、まだ今の宮崎市で起こるとは思いませんが、もう少し先の世界に起こり得るだろうと思いますので、一つの言い方として、親が学校に行かせないことが駄目なんだという言い方は、そういう人たちを否定することになってしまうので、選択的不登校という可能性もあるということは、一つあるのだと思います。 今、国の議論においても、そういうフリースクールに対する条項を認めないのか、学校認可を認めないのかということが、実は議論としてあるのと、あと個別学習計画という一人一人に学習指導要領に則ったような学習計画を、生徒一人一人に作ってあげて、それを教育委員会が認可さえすれば、学校じゃなくてもきちんと義務教育を終えたことを認定できるような制度について、どう考えるかという議論もあります。また、先ほども市長が気にされていたことは、福祉の世界だと思いますが、学校が福祉機能をどこまで担えるかということを、本気で教育委員会としては考えていかなきゃいけないのではないかと考えています。 どうしても、保護者の方々に何かをご理解をいただくのは、とてもセンシティブな話ですし、また、保護者の方々に我々が何かを伝えるという時に、保護者には聞く義務は当然無いわけですから、ソーシャルワーカーですとか、その家庭に対して働きかけられる、それこそ保健所とかとの連携も出てきますが、いかに連携しながら、学校から端を発して、そういった支援が必要な家庭に対してアプローチをしていくのか、そのあたりの連携の仕方は確実に機能するのかなとは思います。
戸敷市長	フリースクールについては教育長とも話をしたことがありますが、これだけ不登校が増えたら、手が出せない状況がありましたが、少しずつこういうふうに改善していけば、また違うかもしれません。 学校ではなくても、人格を形成するために、福祉が必要なわけですから、自

	分の感覚もないような状況で社会で育つという状態は、日本全体がおかしくなります。不登校の子どもたちが、様々な授業や学習の機会を受けて、自分らしさを出していく可能性もあると思います。それは、私たちが与えるものかなという気もしますが、その辺りも全然わかりません。神野さんにまた情報をいただければ、ありがたいと思います。 　それでは、今門委員いかがでしょうか。
今門代表教育委員	タブレットが導入される前から、授業改善は言われていましたが、タブレットを使う事が授業改善ではありません。タブレットはすばらしいツールなのですが、あくまでも一つのツールです。説明の中でお話がありましたが、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を交互に取り入れることが大事なんだということでした。交互に取り組むことはとても難しいことで、先生方も努力していかないとなりません。 　これは、どこの職場も同じで、ある病院に行ったときに、病院の看護師さんが言われたことですが、「看護師の免許をとったら、これで一生安泰だとずっと思っていた。ところが、新しい薬や機械が入ってきて、どんどん勉強しないといけない。日々勉強、一生勉強だ」という話をされました。学校の先生も一緒で、ここにいる我々も皆やっぱり日々勉強、一生勉強な感覚をもっていないとこれからの時代には、対応していけないとそういった感想を持っているところです。
畠山教育委員	私も、ＳＴＥＡＭ教育のアートの部分では、これからも子どもたちに感動を届けられるような活動をしていきたいと思っています。芸術は心が満たされるという部分が非常に大きいと思います。情報の「情」も感情の「情」と書きますし、人情の「情」と書きますし、この情報溢れる社会が本当に人情豊かな心豊かな社会となるように、これからが楽しみだと思いながら、今日は意見交換に参加させていただきました。ありがとうございました。
小林教育委員	先程、市長がおっしゃったように人格形成はすごく大事だと思います。そのためにも、先生方が元気でいただきたいという思いがありますので、それを考えますと、やっぱり私たちの存在は学校現場が活性化していくというか、活力をみなぎらせていくような、そういった教育委員会でありたいという思いと、一方で、それがきちんと出来ているからこそ、成果が見えてきてるのだと思います。引き続き、皆さんの力を合わせて取り組んでいただけたらと思います。
片山教育委員	教育現場にＩＣＴやタブレットが導入されて、今まで、私が違和感をもっていた、教えられるだけの教育、詰め込まれる教育から、友達同士とか、クラスの中で出来ない子には、その子をそっとしておくというような視点ではなくて、先生が子どもたちを取り囲んで、子どもたちも一緒に教え合って、学び合える創造的な教育ができるのではないかと、タブレットが入ってきた事ですごく期待しているところです。

西田教育長	今後の展開として今、教育情報研修センターと学校教育課等が中心となっていますが、広がりとして健康管理をどうするかとか、教育施設をどう結びつけるかとか、まだまだＩＣＴを活用できる部分がたくさんあります。少しずつ一歩でも進めるように頑張って、子どもたちが色々な世界を体験できるように、子どもたちのためになるような管理ができるように、取り組んでいきたいと思います。
戸敷市長	神野さん、最後にアドバイスをお願いします。
神野教育ＣＩＯ	デジタルということで考えると、先ほどのデジタルのルールは、今後すごく大切になってきます。これは、「デジタル・シティズンシップ」という呼び方をしますが、デジタル上の市民性のような、その市民生活上ではどう考えるかというようなものだと思ってください。 例えば、ゲームをしている子どもがいたときに、学校ではゲームは駄目というルールを作ったりだとか、そういうことを強いて解決するかというと、実はそうではありません。なぜかというと、１８、２０歳になったら、子どもたちは、自分でデジタルをもって社会に飛び出していきます。そのときに、当然ですが法律的にゲームは禁止されていませんので、我々が勝手に禁止をしていたら、結局子どもたちがゲーム漬けになってしまうということになるわけです。 大切なのは何かというと、ルールで縛るのではなく、いかに子どもたちが自立的に自制心をもって取り扱えるかという、その心を育てることが大切です。 ここがすごく難しいところで、そしてまたこれは今、本当に全人類的に課されてることだと思います。今の子どもたちだけではなく、下手すると、我々世代もそうであるし、全てがこのデジタルというものが現れて、これとどう人間は向き合うのかということを、すごく考えなくてはいけません。そんな時期だからこそ、教育委員会も、また学校の先生達とともに、デジタルとどうつき合っていくかということに関しては、一律にルールを決めるのではなく、保護者、生徒、先生方が三位一体の中で、どう取り組んでいくのかを考えていきたいと思います。
戸敷市長	様々なご意見もいただいて、これで解決するわけではないですが、このＩＣＴを活用したまちづくりの中で、子どもたちを最優先に考えたとき、私たちの模索あるいは実行、行動が今後どう変化していくかは考えていかなければならないと思います。 今日は、子どもの主体性というのは何かを、また問題点を解決していくための、私どもの新たな視点も必要だと感じました。私が常に思っているのは、学校、家庭、子ども、この連携がどうすればうまくいくかを常に模索し、よりよい子どもを育てることを考えていかないといけないというところです。今後も、スムーズに進んでいる部分は、更に探求していただくことをお願いしたいと思います。

	大変だろうと思いますが、成果が少しずつ出てきたことは、私たちが少しずつ自分らしさという視点で、子どもたちを見れるようになってきたのかなと思います。 今後とも、ご指導を賜りますようよろしくお願いします。まとめにはなりませんが、まちづくりは人づくりと常に申しあげておりますので、そのことをまた皆さんと協力して、教育行政と一般行政と一体となって取り組んでいきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。
川﨑課長補佐	以上をもちまして、令和３年度宮崎市総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。